

現象学的「本質観取」の方法を用いた哲学対話の実践 —「死への恐怖」、「嫉妬」の本質を例として—

小井沼 広 嗣

岐阜聖徳学園大学教育学部

Practices of Philosophical Dialogue Using the Phenomenological "Essential Insight Method": Examples of the Essence of Fear of Death and the Essence of Jealousy

Hirotsugu KOINUMA

キーワード：哲学対話、本質観取、本質、体験、共通了解

I. はじめに —本研究の背景と目的—

大学において哲学や倫理学を講ずる意義は大きくいって2つ考えられる。1つは、歴史上の著名な哲学者の思想や学説に関する知識を得ることである。このことはたんに学問の1つを学ぶということ以上の意味がある。学問の歴史を振り返ると、哲学は——今日一般にそう見なされているように——たんなる人文科学の一分野ではなく、西洋では《あらゆる学問がそこから派生した》という意味において、万学の祖でもあった。そのかぎり、哲学に関する歴史的知識を得ることは、たとえば文学、歴史、教育、法、政治など、人文社会科学の諸分野を学ぶ上で、あるいは自然科学の歴史を学ぶ上でも、大いに役立つ。しかし、哲学・倫理学教育の意義は、歴史上の哲学者の思想を知ることのみにあるわけではない。もう1つの意義は、哲学的な問いをみずから考えてみることにある。哲学的に思考することは、人間や社会、あるいはこの世界のあり方を根本から捉え直そうとすることである。そのかぎり、そうした思考法をみずから実践することは、物事を深く考えるためのすべと力を身につけることにつながる。

このように、哲学は単なる知識ではなく、自分自身で物事を深く考えるための技法 (art) でもあり、哲学・倫理学教育はこれら双方を充たすべきである。筆者はこのような考えから、大学で哲学や倫理学の授業を担当するにあたり、一般的な講義に加えて、哲学対話の機会も設けてきた。もっとも、筆者がこれまで主に行ってきた哲学対話は、現象学的「本質観取」という方法を用いたものであり、これは一般に「哲学対話」という名で普及しているものとは異なる。そこでまずもってそのことに触れておきたい。

近年、哲学対話を学校教育に取り入れる取組が急速な広がりを見せているが、そのほとんどはアメリカの哲学者マシュー・リップマン (Matthew Lipman, 1923-2010) が考案した「子どものための哲学 (Philosophy for Children)」と呼ばれるやり方を土台としている (「子どものための哲学」はその頭文字から「P4C」と呼ばれることが多いので、以下、本稿でもP4Cと表記する)。P4Cのやり方やその教育実践については日本でも近年多くの書籍が出版されており、一般的な認知度も高まっている。一方、本稿で取り上げる「現象学的な本質観取」を用いた哲学対話は、実践者の数がまだ少なく、一般的にさほど知られていない。しかし本質観取という方法は、後述するように、P4Cとは異なる意義をもつことが見込まれ、筆者の考えでは、この方法は今後、大学の授業や哲学・倫理学の科目にかぎらず、もっと広く学校教育の場で活用されてしかるべき価値をもっている。そこで、この方法をこれから普及させていくためにも、それを用いた教育実践を報告することには意味があるはずである。

II. 本質観取の概要と手順

本節では、現象学とは何か、本質観取とは何か、について確認し、本質観取を用いた哲学対話を行う際の大きな手順を示したい。

1. 現象学的「本質観取」とは何か

現象学は20世紀以降の現代哲学における大きな潮流の1つであるが、その創始者はエドムント・フッ

サル(Edmund Husserl, 1859-1938)である。現象学がいう「現象」とは“意識の体験”のことである。フッサールの提唱した現象学では、①客観それ自体の存在から考えるのではなく、私自身の主観的体験に立ち返ってことがらを考えるという方法的立場に立ち、②その上で、そこから多くの人々が納得するであろう“ことがらの核心的な意味”(=「本質」)を取り出そうとする。前者は「現象学的還元」、後者は「本質観取」と呼ばれ、この2つがフッサール現象学の二大方法論をなしている。

たとえば、「幸福(幸せ)」の本質を例にとろう。どのような時に、どのようなことに対して「幸せ」を感じるかは人それぞれで異なるだろう。したがってまた、「幸福」や「幸せ」という言葉から受け取る意味合いも各人で少しずつ異なっている。もっともそのことは、「幸福」について人々のあいだで共通理解が成立しないということの意味しない。むしろ、私たちが日常の会話のなかで「幸せ」という表現を用い、それによって多くの場合は滞りなくコミュニケーションが成り立つという事実には、幸せという言葉・概念のうちに、他者と共通理解しうる一般的な意味が含まれていることが暗示されている。本質観取は、そうした私たちが暗々裏に直観している概念の一般的な意味を手がかりにし、各人がその言葉でくくられる体験例を出しあう中で、その体験を成り立たせている核心的な部分を明瞭化しようとするものである。したがって、幸福の本質といっても、“絶対的な真理”としての幸福をどこかに想定し、それを解明しようとするものではなく、広く人々のあいだで共通理解しうる、幸福の核心的な特質を明らかにしようとするにすぎない。

それゆえ、現象学における「本質」の探究は、天才的な哲学者だけに可能な秘儀のようなものではなく、万人に開かれた公共的なものである。誰もが等しい資格をもってその営みに参加しうるし、取り出されたことがらの意味が「本質」としての妥当性をもつかどうかについては、必要があればそのつど誰もが自分の実感や体験に立ち返って吟味・検証し直すこともできるわけである。

2. 対話的方法としての本質観取とその手順

もっとも、ここで断っておくべきことがある。それは、フッサール自身は本質観取を対話的な方法としては論じていないという点である。むしろ彼は、本質観取を行う際の具体的作業として、(一人称としての)私が遂行する「想像的自由変更」ということを語っている¹⁾。——具体的な事実としての自己の体験(たとえば、ある机の知覚)から出発し、想像の中でその対象に自由な変更を加える(形や色を変えたり、脚の数を換えたり、等)。そして、そうした自由な変更を加えてもなお残る、当の体験の「一般的類型」がその本質をなす、といった具合に。

フッサールの言うように、本質観取は1人でもできないことはない。想像を用いることで、たんなる一個人の体験ではなく、他の多くの主観に妥当するような体験の一般性を取り出すことは可能である。しかしながら、自分1人では十分な考察の目が行き届かず、そこで取り出された本質は独りよがりのものになってしまう可能性が多分にある。

こうした難点を踏まえ、フッサールが説いた本質観取を対話的な方法へとアレンジしたのは、竹田青嗣と西研である。とりわけ西は、具体的な実践例と共に、その具体的な手順とポイントを分かりやすく解説した論考をこれまでに数多く発表している。筆者が行ってきた本質観取の対話実践は基本的に、西のやり方になっている²⁾。そこで以下では、西の説明を踏まえつつ、筆者なりにその基本的な手順について述べよう。

<基本的な手順>

- ①ことがらについての既存の諸説や学問的定義、あるいはそれについての辞書的な意味はすべていったんペンディングにしておく。
- ②当のことがらが自分にとっていかなる意味として意識され・体験されているかをよく内省し、それぞれの体験事例を出しあう。
- ③多くの体験事例に共通するものを摘出し、その共通本質を適切な言葉で表現する。
- ④テーマに関連した疑問点や問題関心について話し合う。(必要に応じて)

Ⅲ. 実践内容の詳細

今述べた本質観取の方法を用いた授業実践として、以下では2023年度前期に開講した「哲学概論Ⅰ」

で行った哲学対話の内容を報告したい。15回ある授業のうち、4回分（7回目と8回目、14回目と15回目）を哲学対話の機会に充てた。各回の内容は次のとおりである。

- 1回目：本質観取の概要と手順の説明／死への恐怖の本質／嫉妬の本質（前半）
- 2回目：嫉妬の本質（後半）
- 3回目：自由の本質（前半）
- 4回目：自由の本質（後半）

本稿では紙幅の都合上、1、2回目で行った「死への恐怖の本質」と「嫉妬の本質」を取り上げることにし³⁾、3、4回目に取り組んだ「自由の本質」については別の機会に回すこととしたい。

1. 「死への恐怖」の本質

1番目のテーマである「死への恐怖」の本質は、本質観取の中では最も易しい部類のテーマであり、筆者は導入として近年このテーマを最初に学生たちに取り組ませることにしている。1回目の哲学対話の授業に際し、学生たちにはあらかじめ次の課題に取り組むよう指示しておく。

<事前課題>

「誰だって死ぬことは怖いだろう。ではなぜあなたは(自分の)死を“恐ろしいもの”だと思うのだろうか？その理由を書いてきなさい。」

授業当日は、本質観取の概要と手順を簡単に説明した後、5、6人ごとにグループ分けをし、グループ内でそれぞれ、この課題について自分なりに書いてきたことを発表し合ってもらった。以下では、多くの学生にみられる代表的な回答をいくつか紹介しつつ、筆者なりの補足をダッシュ（—）以下で加えてみる。

- a) 「死後の世界がどんなものなのか知らないから怖いと感じる。“極楽浄土”、“天国”、“地獄”など、死後の世界をあらゆる言葉やその世界の説明について色々あるが、どれも架空である。自分だけでなく、自分の親やどんなに頭が良い人でも知らない世界であり、生きているうちには知ることができないので怖い。」

—これは最も多くみられるタイプの回答である。私たちは誰もがいつか必ず死んでしまうことを知っているが、死というものが何であるかに関しては誰も決定的なことを知らない。宗教は、死後の世界や輪廻転生などについて語るが、それが本当なのかどうかは誰も分からないし、確かめようもない（だからこそ宗教は事実に関する知ではなく、信仰の問題とされる）。その意味で、死は私たちにとってまったく未知なもの、不可解なものである。そうした死をいつか自分も必ず迎えなければいけないということ、そこに死の怖さがある。この種の怖さの観念は、①「未知なるもの・不可解なものとしての死」と名づけられるだろう。

- b) 「私は友人・家族と過ごす時間が大好きだ。そして教員という夢を叶えるために努力している大学生活に充実を感じている。だが、この生活が突然なくなると考えるとすごく怖い。家族や友人に感謝が伝えられていないし、教員になるという夢を叶えずに人生が終わるのは嫌だ。きっと今の生活が充実しているから、それがなくなることにおそろしさを感じるのだと私は考える。」

- c) 「私が死を恐れる理由は、今世への未練を残したまま死ぬのが惜しいからだ。私にはやってみたくことが沢山ある。日本中の山に登りたいし、もっと素敵な絵が描きたいし、小学校教諭にもなりたい。ゆえに、死ぬのはもったいない気がしてしまう。」

—当然だが、死ねば、生きているときにできること、追求できることがすべてできなくなる。おいしいものを食べることも、友人や恋人と遊んだり語りあうことも、なにか目標に向かって努力するといったこともできなくなる。死はあらゆる生の可能性を奪い去るものとイメージされるかぎり、恐ろしい。こうした恐れのコアは、「あらゆる可能性の喪失」と呼びうる。（そのなかには、家族とも恋人とも友人とも会えなくなるということも当然含まれており、この契機だけをネーミングするとそれば「親しい人との永遠の離別」といった表現が与えられうるだろう。）

d) 「自分という存在が世の中から消えてしまい、自分の周りの人に忘れられてしまうのが怖い。」

e) 「私は、この世の中から自分の存在が無くなってしまふと感じるから死への恐怖があるのではないかと考える。生まれてからまだ20年ほどではあるが、その間に経験してきたことや感じてきたことが数多くあったのも事実である。しかし死んでしまうことでそれらすべてがなかったことになってしまふような気がして死への恐怖感が出てくる」。

——私が死んだら、親しい友人などはきっと深く悲しんでくれるだろう。しかし段々と月日が立つにつれ、私と過ごした記憶なども薄れ、忘れられていくかもしれない。さらに言えば、やがては私がこの世界に存在したということを誰も知らない世界、自分が存在したことの痕跡すらない世界がやってくる。こうした怖さの核心は「自分の存在が無に帰すこと、または忘却されること」と名づけられるだろう。(ちなみに言えば、「自分の存在を後世にとどめたい」という願いは多くの時代・社会においても広く認められるもので、そのために多くの人が自分の作品や業績を残そうと努力してきた。)

f) 「死の直前にはほとんどの場合、苦しみや痛みを伴うと考えられるから。」

——これも複数の学生が書いてくる。病気であれ、事故であれ、多くの場合、死に至るに際しては痛みや苦しみを伴う、だから死は怖い、というものだ。これは「死へと至るさいの痛み・苦しみ」に対する怖さと名づけられる。もっとも、この場合の恐怖は“死そのもの”に対するものではなく、死へと至る“過程”についてのことであり、その意味では上述した諸項目とは質的に異なる点も注意しておくべきだろう。

以上が代表的な回答である。多くの学生は1つの理由だけでなく、複数の理由を書いてくるが、それらはおおよそ上述した4つの理由のいずれかに当てはまる。ただし、1人だけの回答であっても、なかには本質的と言いうる見解や、興味深い見解を書いてくる学生もいる。1つだけ紹介しよう。

g) 「死後に存在するといわれている“天国”と“地獄”の様子などが書かれた書物を目にし、地獄の恐ろしさを知ったから。小学生の頃、地獄に関して書かれた絵本を、読み聞かせの際に1度目にした。その絵本がかなり衝撃的であったため、脳裏に焼きつけられた。」

——これは「未知なるものとしての死」ではなく、むしろ何らかの宗教が語るはつきりとした死後の世界の恐ろしさを述べている点で興味深い。ひとびとのあいだで特定の宗教的な死生観がしっかりと共有されている時代・社会であれば、おそらく死の未知性ではなく、この種の恐れを抱くひとのほうが一般的であったろうと推測される。

学生たちは普段考えもしなかったようなテーマについて考えをめぐらせ、他の人と意見交換できたことが新鮮だったようである。学生の授業感想を2つほど紹介しよう。

a) 「今まで考えたこともなかった問題について今回考えてみたことで人生の深さのようなものができたような気がする。さらに、その問題に対する答えをいろいろな人と共有することでより深さが増したような気がする。意外と同じ意見が出て驚いた。」

b) 「死については、未知のことだから怖いとだけしか〔自分では〕考えていなかった。しかしグループでの話し合いを通して、未練や心配・孤独になることなどを挙げられ、新たな視点を得ることができた。意見を聞き、どうしてそう思ったのかなどの質問を行う対話は自分の視野を広げる活動に適していると思った。」

次のテーマに移る前に、本質観取全般に関わることとして、2点ほど補足をしておく。

1) 下線を引いた各項目のネーミングはいずれも筆者なりに考えたものである。本質観取の作業では、諸々の事例に共通する本質特性を適切な言葉(簡潔で、かつ的を得た言葉)で表現する技量が大切になってくる。初めての学生たちにとってはこれがなかなか難しい。けれども何回か本質観取を重ねていくと、学生たち自身から段々と適切な言葉(ネーミング)が出るようになってくる。

2) ここで取り上げた「死への恐怖」のように、テーマによっては、本質をなすものが必ずしも1つに集約するとはかぎらず、いくつかの項目に分かれる場合もある。もっとも、今回の授業ではそこまで掘り下げなかったが、それらの関係性をさらに問うことも可能である。死への恐怖の場合、核心をな

すのは「未知性」（死んだらどうなるかを知りえないこと）と「不可逆性」（死んだらもはや二度と生の状態を取り戻せないとイメージされること）という2契機なのではないかと考えられる。

2. 「嫉妬」の本質

2番目に取り組んだテーマは「嫉妬」である。「死への恐怖」と同様、このテーマに関しても学生たちには事前に課題を提示した。

<事前課題>

「《誰かに嫉妬を感じた》というあなた自身の体験エピソードを2つ書きなさい。そのさい、《どうして嫉妬を感じたのか》という点についても考察をめぐらし、その理由も書いてきなさい。」

そして、授業当日は、グループに分かれ、事前課題をもとに自分の書いてきた体験エピソードと考察を話し合ってもらった。

学生たちが挙げてくる体験例は、その年齢に相応しく、部活動や成績、恋愛、友人関係、兄弟関係といったものが多い。嫉妬の場合は、諸々の事例をつらぬく共通本質が比較的是っきりしているので、分類することはあまり重要ではない。そこでここでは学生が書いてきたエピソードと考察を4つほどランダムに紹介しよう。

- a) 「小学4年生の頃にサッカーチームに後から入ってきた子が、自分からスタメンを奪っていったとき。その子よりも自分のほうがずっと前からサッカーをやっていたのに、あっという間にスタメンをとられ、才能の差を見せつけられた気がした。」
- b) 「僕には中学時代好きな子がいた。その子のことを好きな同級生が〔他にも〕一人いて、僕は勝手に彼（以後、Aくんとする）のことが少し嫌いだった。その子はなんとなく、自分と話しているときよりもAくんと話しているときのほうが盛り上がっている気がして、その会話を聞くのも嫌だった。ある時、その子にさりげなく、「最近Aくんと仲良いよね」と言うと、「LINEとか多くて、少しめんどくさい」と困りながら話してくれた。それを聞いた瞬間、僕はうれしくて仕方がなかった。そのとき、自分はAくんに嫉妬していたことに気がついた。自分よりもうまくいっている気がしていたから嫉妬していたのだと思う。」
- c) 「自分が受験して落ちた大学に友人が受かって通っているのを知ったとき。落ちた大学は中学1年生からずっと通いたいと思っていた大学なのに、友人は滑り止めとして同じ大学に受験していた。私自身が行きたいという気持ちが大きかった大学に、気持ちが小さい相手に合格を取られたのが悔しかったし、そのような人に負けてしまうような勉強しきれなかった自分にとっても失望した。〔中略〕劣等感のようなものが嫉妬という気持ちにつながったのだと考える。」
- d) 「〔小学校に進学する際〕ランドセルを買うときに、私はピンクがよかったけれど、親に赤じゃないとダメだと言われた。妹のときもてっきり赤だと思っていたら、妹の好きな水色のランドセルを買ってもらえていた。自分との不平等さに嫉妬した。」

いずれもよく分かるエピソードであり、とりわけb)とc)は、状況やコンテキスト、湧きおこった感情の動きが丁寧に記述されており、その感情が読み手にもありありと伝わってくる。嫉妬は思春期・青年期の若者が抱えがちな感情でもあり、話し合いが盛り上がりやすい。今回も実際、多くの学生たちが熱心に話している光景が見受けられた。

第1回目の授業は以上で終えたが、2回目の授業に際しては、新たに次の課題を出した。

<事前課題>

「①嫉妬という感情はどういう条件の元で、どういう相手に対して生じてくるものだと考えられるか？（言い換えれば、嫉妬という感情を成り立たせている本質契機とは何か？）考えてきなさい。」

②嫉妬を抱くことは一般的に卑しいと考えられているが、それはなぜなのか？ 考えてきなさい。」

①については、前回の体験エピソードに関する話し合いを踏まえて考えられるので、かなり本質を突いた見解を書いてくる学生が多数いた。ここでは3つほど回答を紹介しよう。

- a) 「自分よりも上すぎる相手には嫉妬しなくて、むしろ自分にとって身近な人に嫉妬すると考える。例えば自分がスポーツをやっていたとして、プロ選手にはすごいなあくらいしか思わない。しかし自分のチームメートのほうが自分よりも上手いっていると嫉妬する。だからこそ、嫉妬する相手は自分の周りの人で、同じようなことをしている人だと考える。」
- b) 「嫉妬の対象となる相手は自分の身近にいる人物かつこの人には負けたくないという対抗心がある人なのではないかと考える。〔中略〕この人には負けたくないと思いつつ、しかし現実には相手よりも劣っていると、「なんであの人にはこんな才能があつて自分にはないのか」という自己嫌悪から嫉妬につながるのではないかと考える。」
- c) 「相手より自分が劣っている、または、相手が自分より優位な状況に置かれていたり、自分にはないものをもっていたりする時に生じる。基本は自分と同じくらいの能力をもっている相手（ライバル的な存在）に対して起きるものだと思う。」

これらの回答は嫉妬体験の核心をなす共通本質をしっかりと含んでいる。これらの回答と重複する部分も多いが、筆者の方でもあらかじめ嫉妬の本質について自分なりに考察した文章を用意し、授業内でも発表したの、この課題のまとめの意味合いを込めて、それを以下に添付しよう。

嫉妬は以下の3つの本質契機から成る。

- ①自分が満たせていない、自己の中心的な欲望・願望を充たしている身近な（自分と同等か、自分よりも下に位置すると思われる）存在がいること
- ②そうした存在を目の当たりにすることで自尊心が傷つけられること
- ③自尊心が傷つけられたがゆえに、その相手に対して敵対感情ないし憎悪の念が向けられること

①について・・・嫉妬が向けられる相手は、それを充たすことが私にとって重要・切実な関心事であるような欲望を充たしている相手である。かりに私の中心的な欲望が、プロ野球選手になることだったとしよう。その場合、私はプロの落語家になれた相手に対してはあまり嫉妬を抱かない。その相手が満たしているものが、私が目指しているものとは異なっているからだ。

・嫉妬の念が湧いてくるのは、自分と同等だと思われる存在（あるいは、自分よりも下に位置すると思っていた存在）が、自分が満たせていない願望を実現している場合である。そうした場合、「なんで俺ではなく、あいつなんだ？」という“割り切れなさ”が生じ、これが嫉妬の火種となる。かりに相手が自分の手の届かない高みにいる場合や、自分と同一地平に立っていない場合（たとえば自分よりかなり上の世代の人であったりした場合）、私はその相手に対して嫉妬を抱かないだろう。

②について・・・自分と同レベルの人間なのに、相手は自分の欲しいと思っているものを手にしており、自分は手にしていない。このことによって私は“自尊心が傷つけられた”と感じる（言い換えれば、“自己価値の下落”を味わい、惨めな気持ちが湧いてくる）。もしも自尊心の毀損が伴わない場合には、それは「嫉妬」ではなく「羨望」と呼ぶ（「妬ましい」ものではなく、「羨ましい」もの）。一般的に、羨望の対象となるのは自分と直接かかわりのない遠い存在である。

③について・・・嫉妬という感情の中心は、相手に対する憎悪ないし敵対心である。ただし、嫉妬はたんなる憎悪ないし敵対心一般ではなく、今述べた①②の条件を伴うかぎりでの憎悪・敵対心である。

次に、「嫉妬はなぜ一般に卑しいと考えられているのか」という問題に移る。これは嫉妬というテーマに関わる発展的問題として筆者なりに提示したものだが、これについても多くの学生が鋭い意見を出してくれた。3つほど回答を紹介しよう。重要な部分には下線を引いておく。

- a) 「嫉妬するということは、自分と相手を比べることになる。「ひとはひと、自分は自分」と考えて自分の道をいけばよいのに、わざわざ比べて「なんでこの子は上手くいくんだ・・・」というような思いに陥っている。自分の心の中で勝手に比べて、相手に怒りの感情をおぼえたりしているので、

卑しいことなのだと考える。」

- b) 「嫉妬は、自分が持っていないものを他人が持っていることを羨ましいと感じることや、他人の幸福をみて自分が不幸だと考えるさいに引き起こされる感情で、嫉妬心には、自己劣等感や不安、怒り、自己否定などの負の感情がつきまとう。しかも、その負の感情をもとに、勝手に周りの人を攻撃したり、大事な人を傷つけたりしてしまう。それが公になると周囲の人がみっともないと思うから、嫉妬を抱くことは卑しいのだと思う。」
- c) 「嫉妬を抱くことが卑しいことだとされる理由は、自分に満足できず、他人の幸せを妬んでいるからだ。自分に満足ができなかったら、自分を磨いて、満足できるように努力することがよいことだと思う。ところが、嫉妬は、自分は行動せず、他人のことをわるく思うだけである。加えて、嫉妬をしたら結果的によくない行動（たとえばストーカー行為やスポーツにおけるドーピングなど）に及ぶことも多いので、卑しいこととされるのではないか。」

観点はそれぞれで若干異なるが、上記の回答からはやはり相通じる洞察がみてとれるだろう。ただし、この問題については少し補足を加えたい。「なぜ嫉妬は一般に卑しいものとみなされているのか」という問題は、“世間的な” 価値評価に関わる問題であり、したがってこの問いを考える際には、自分自身の体験に裏打ちされない“推察”の要素が入ってくる。だから、端的に嫉妬の本質契機を問うた前述の課題よりも、多様な意見が出やすい。しかしこの問題にも体験に根差している部分はある。他人に嫉妬を抱くとき、ひとはそうした感情を抱いている自分自身に嫌悪の念を抱くことも多いだろう。その所以は、嫉妬をよくないものとする世間的な価値評価がそこに反映されているからだと考えられる。したがって、そうした嫌悪感がなぜ湧きおこるのかという点を丁寧に内省してみれば、この問いについても“自らの体験に即した考察”が可能である。学生たちはおそらくそこまで分かった上で回答を書いているわけではない。けれども、彼らの回答のうち一定の共通性が認められる所以、あるいはそれぞれの意見を交わす中でお互いの意見に納得が生じる所以を問うてみると、やはり今述べた点に答えがあるように思われる。

IV. 考察・分析

1. 《みずからの体験に即して考える》ことの意義

これまで論じてきたように、現象学的な本質観取という方法を用いた哲学対話では、“みずからの体験に即して” 考えるということをひときわ大切にす。このことの意義は大きくいって3つある。

1つは、自己の体験を内省することは誰にでもできることなので、知識量やすぐれた思考力の有無といったことに左右されず、誰もが等しい仕方に対話に能動的に参加できる、という点である。

第2は、議論が空転してしまうリスクが低いことである。今回は取り上げなかったが、たとえば自由、幸福、正義、悪など、より抽象的な概念をテーマにして哲学対話をした場合、抽象度が高いだけに、様々な見解が飛び交いこそすれ、どこにも帰着点がみえない議論に終始してしまうことがありうる。それに対し、本質観取の場合は、自分ないし自分たちの体験に裏打ちされているかという点が、そのつどの見解の妥当性を吟味する上での試金石となる。したがって、限られた対話の時間のなかで「本質」と呼ぶうる洞察にまでたどり着けるかは別として、相互の納得のもとに着実に考察を進めることができる。

第3に、各人の体験エピソードを取り交わすプロセスは、それぞれの人の実存的な感度を窺い知る貴重な機会となると同時に、自分自身のことを深く振り返る機会ともなる。西がこの点を的確に表現してくれているので、それを引用しておこう。「各人のエピソードを語り合っていくと、他者の独自の人生とその感じ方とをかいま見てそれを新鮮に感じながら、同時に自分の体験と深く共通するものがあることを感じます。それぞれの人の経験の“独自性と深い共通性”とをともに実感できること、そこに本質観取の意義があります⁴⁾」。

2. P4C との違いについて

現象学的な本質観取を用いた哲学対話は、テーマとなっていることについて互いに納得しあえる本質を見いだそうという、明確な方向性をもっている。この点はP4Cとははっきり異なる特質なので指

摘しておこう。

P4Cでは一般に、《対話者同士の意見をまとめる必要はないし、結論的な答えを出す必要もない》ということを基本方針に掲げている。そうしたP4Cが学校教育で導入されはじめた背景には、ともすると“正解主義”に陥りがちだった従来の学校教育のあり方を反省し、児童生徒（あるいは学生）の自由な思考力を伸ばし、自由な発言の機会をつくろう、という動機がある⁵⁾。この動機自体は筆者も大いに賛同するし、それは「主体的・対話的な深い学び」を謳う現在の教育界の方向性にも沿うものであると考える。しかし同時に、そうした対話にはリスクもありうると考える。対話において結論を求めないことを最初に掲げてしまうと、他の人と共通理解をつくろうという参加者の意欲を端からそいでしまうことになりかねない。そうすると、その哲学対話は、《絶対的な正解はなく、各人各様の考えがあるだけだ》という相対主義的な構えを参加者に植え込んでしまうリスクがある。

客観主義的な見方をペンディングにする現象学ももちろん、《絶対的な真理がある》といった考えは支持しない。しかしこのことは、《哲学的な問いをめぐっては共通理解が得られない》ということだけをけっして意味しない。本質観取を用いた対話では、各人の個別的な体験を大切にし、そこを出発点にしつつも、対話を進めていくうちに段々と多くの人に共通するものが見出されてくる。絶対的な答えといったものはなくとも、多くの人々が納得できるような本質的で深い洞察がありうるということが分かってくる。そこには独特の充実感がある。ある学生は授業感想のなかで「初めて自分の出した答えに納得ができたのでとてもうれしかった」と書いてくれた。受動的に教わったものではなく、自分で考えを紡ぎ出し、しかもそれが他の人に共感・賛同してもらえたら、それはひととき価値あるものとして当人の心に残るものとなるだろう。できるだけ多くの学生がそうした体験を味わえる場となるよう、やり方の工夫や改良をたえず図りつつ、今後もこの方法を用いた教育実践を続けていきたい。

V. 今後の課題

紙幅の都合上、本稿では検討できなかったことも多い。本質観取とP4Cとの違い、それぞれがもたらす教育的効果については、より掘り下げて考察する必要があるし、本質観取のファシリテーター（進行役）をするさいの留意点などについても論じることができなかった。これらについては別の機会に論じることとしたい。また、自由、不安、幸福、正義など、筆者が他のテーマで行った哲学対話の実践内容についても、別の機会に報告したいと考えている。

注・文献

- 1) E. フッサール (2001) : 『デカルト的省察』, 浜渦辰二訳, 岩波文庫 : 127-130.
- 2) 西は多くの著作でその手順を紹介しているが、ここでは以下のものを参照。
西研 (2020) 「本質観取をどのように行うか——現象学の方法と哲学的人間論」, 竹田青嗣・西研編著『現象学とは何か——哲学と学問を刷新する』, 河出書房新社 : 61-120.
- 3) 本質観取を用いて「死への恐怖」の本質を論じた先行文献としては、西研 (2001) 『哲学的思考——フッサール現象学の核心』, 筑摩書房 : 350-352 が、また、「嫉妬」の本質を論じた先行文献としては、苫野一徳 (2019) : 『ほんとうの道德』, トランスビュー : 102-107、ならびに、西研 (2020) : 「本質観取をどのように行うか——現象学の方法と哲学的人間論」, 前掲書 : 88-96 がある。ただし、言うまでもないが、本稿で論じるのはあくまでも筆者が自分の授業のなかで行った実践内容であり、これらの文献で展開されている分析内容とは若干異なる部分もある。
- 4) 西研 (2015) : 「人間科学と本質観取」, 小林隆児・西研編著『人間科学におけるエヴィデンスとは何か——現象学と実践をつなぐ』, 新曜社 : 159.
- 5) 梶谷真司 (2018) : 『考えるとはどういうことか——0歳から100歳までの哲学入門』, 幻冬舎新書 : 第1章.